

深情け

今日 あした

並木昭一の葬儀は代々幡斎場で身内だけで行われた。葬儀と言っても昭一を火葬する間、元妻の貞と三人の子供がじっと待っていて、焼き上がった骨を骨壺に入れて持って帰るだけという簡単なものだった。

「母さん、みんな集まったのだから、あそこのファミレスでも精進落としをして帰りましょうよ」。長女の初子が貞の肩に手をまわして言った。

貞は大正生まれにしては背が高い方だったが、九十才ともなると、昔より二十センチも縮んで今では百四十位しかない。

「そんなのごめんだね。やりたかったらみんなで行っておいでよ。私は寄り道をして帰るから」

「寄り道って、骨壺はどうするの」

「持つて行くよ。父さんに見せたいものがあるからね」

「父さんに見せたいものって、葬式もしたくないって言ったのに……」

「昔住んでいた淀橋浄水場の辺りを見せたいんだよ」

「そう言うと、貞は骨壺を目の高さまで持ち上げて、

「あなたの新宿を見せてあげるよ、あなたの霊魂はまだこの辺りを漂っているのだろう。都庁の展望台に行けば一望だろう。」

初子、タクシーで行けば案外近いのじゃないかね」

「ばかばかしい、父さんの霊魂を喜ばせるために新宿の斎場を選んだの？ それならまともな葬式をしてやればいいのに……、母さんの気持ちがさっぱりわからないわ」

「新宿なら埼玉に住んでいる仁美も、千葉に住んでいる洋輔も帰りが楽だろう。忙しいのに出て来てもらって悪かったね。あんたたちはファミレスで精進落としをして帰ったらいいじゃないか」

「憎まれ口ばかり、年を考えてよ、こんなに重い骨壺を持たせて母さん一人で行かせるわけにはいかないわよ」

初子が言うと、

「それじゃあ初子姉さん、僕たちも一緒に都庁に行くよ」と洋輔。

「わざわざ来ることなかったのに、これ以上父さんに付き合うことはないよ」

「僕たちにも父さんは父さんなのだから、母さんに付き合っただけでやるよ」洋輔が

言うと、仁美も

「今日は、洋輔と相談してお通夜のつもりで来たのよ。だから、初子姉さん、粕江の家に泊まるからよろしくね」

「まあ、仁美まで……初子、悪いね」と貞。

「いいわよ。久しぶりに実家に来たいのでしょう」

並木昭一の家は親の代から新宿の淀橋浄水場の近くで手広く八百屋を営んでいた。貞も新生まれ、新宿育ち、二人は幼馴染同士の結婚だった。三人の子供達は、初子が大学一年、仁美が高校二年、洋輔が中学三年の時までその八百屋で育った。

時は昭和四十年、淀橋浄水場が廃止となり、並木八百屋店も移転を余儀なくされたのだった。

昭一はどうしても新宿を離れたがらない。近くに移ることしか考えられないようだった。

だが淀橋浄水場から西口一帯が全部立ち退いて、副都心になるというのだ。

「お得意さんも全部立ち退くのだから、何処に行っても同じではないの」と貞。

「田舎に引っ越すなんて、いやだね」昭一は一歩も引かない。

「じゃあ別れて住みましょうか」

「おう、そうしようじゃねえか」

昭一は女癖が悪く、この時も懇意の女がいたのだ。貞は腹が立つよりも愛想が尽きた。

「子供たちは私が連れていくよ」

そう宣言して、小田急線沿線の粕江に土地を二百坪買い、二階建ての木造アパート二棟と親子四人の住まいを建てた。新宿に比べたら考えられないほどの田舎で、土地も安かった。

貞と子供たちは一台のタクシーで都庁に向かった。

「うちの八百屋は浄水場より駅寄りだったから、このあたりだったかしら」

「京王プラザホテルは浄水場の跡地に出来たのだろう」

「浄水場の土手によく登ったよねえ」

「今でも新宿の小学校の時のクラス会があるのだよ」

「私たちもやっているわ」

久しぶりに来たらそれぞれに懐かしさが込み上げる。

タクシーを降りて、第一庁舎、展望台行のエレベータの前に並んだ。全員が喪服を着て、骨壺まで抱え込んでいる。守衛さんが走ってきて、

「四十五階の展望台に行かれるのですか」

「はい、前にこの辺りに住んでいたもので、懐かしくってねえ」

貞が言うと、守衛さんは、エレベータ係の女性に向かって一度うなずいて、扉を閉めるように促した。エレベータが動き出した。

四十五階に着くと貞は、下をのぞき込むように見て

「私も父さんもこの辺りの小学校に通っていたのだね。なんだか天国からあの頃を覗いているみたいだよ」

「ああ、そうかも知れないわね。お母さんの頃は道路は埃っぽくて、アスファルトなんか無かったでしょう、校舎も木造で……。私たちはもう鉄筋の校舎だったし、周りにも三階建てのビルなんか普通にあつたから」

「私は級長だったのだよ」貞は一瞬少女のような表情をした。

「もう何度も聞いたわよ。父さんは弱虫だったからいつもいじめていたんですよ。それなのに、おばあちゃんに見込まれて、小学校の時から昭ちゃんのお嫁さんになって昭ちゃんを守ってって！ って言われていたのですよ」

「そんな話、したかねえ。昭ちゃんの家は大きな八百屋でね、うちは貧乏だったから玉の輿だったのだよ。お義母さんは先見の明があつたのだね、結婚したばかりで初子がお腹にいる時に、東京大空襲があつてお義父さんもお義母さんも亡くなってしまった。一帯が焼け野原で昭ちゃんと二人で自分の土地を囲って一から八百屋を再建したんだ。昭ちゃんは気が良くて誰にでも親切で、いいいいよ、の人だろう、人は寄って来るけど、任せておいたら何一つ無くなっていたよ、母さんが体を張って土地を守つたのだ」

「何てつたつて、級長だったのだね、貞ちゃんは」

「初子！ 親を馬鹿にして！」

……どっこいしょ、貞は長椅子に座り込み、傍らに骨壺の風呂敷包みをおき、それを手でなでながら思い出の中に入り込んだ。

一番いい時は、店に住み込みの子が五、六人いて、通いの家族持ちの店員も何人かいて賑やかだった。お客さんは近所の人もだけど、新宿で店を出している食堂や飲み屋なんかもお得意さんで、注文があると遠くの方までオート三輪で配達もしていたつけ……。

ああ腹が立つ！ 突然貞は思い出した。夕方になるとお客が立て込んで猫の手を借りたほど忙しい。

「はい、いらつしやい、今日は葉物が安いよ、まとめて買っていきなよ」と声を張り上げていた昭一の声が急に弾けるように明るくなって、

「アケミちゃん、今日は早いね、いっぱい買っていきなよ、オート三輪で送ってやるよ」この忙しい時に何を言っているのだろう！

「えー、ホント、嬉しい！」八百屋で黄色い声なんか出すな！

貞は、カッカと頭に血を登らせる。と、

「貞ちゃん、ちよっと配達に行ってくるよ、愛してるよ〜」

と剽軽に言い、客の笑いを取っている。

この忙しい時に何を言っているのだろうかとは思うものの、客も笑いながら冗談を言い合い、機嫌よく余分なものまで買っていく。やることはいっぱいあるのに可愛い子が来ると愛想良く、ホイホイ配達を買って出て、店を閉めたら閉めたでソワソワして、今度は鼻の下を伸ばして、お得意様の店の客になって行くのだ。

根っからの人好きで商売人だったのだろうか。昭ちゃんは。

今頃になって何を思い出しているのだろうか。貞は我ながら呆れている。

「お母さん、気が済んだ？ 帰りましょうか」

一台のタクシーにみんなに乗って狛江に向かった。

新宿を立ち退く時に、貞は昭一と離婚をして子供たちと狛江に移り住んでは、昭一との交流は一切なかった。

子供達を可愛がっていたし、何より賑やかなことが好きだった昭一なのに、子供たちが学校を了えたのも、結婚をして家庭を持ったのも、孫が生まれたのも何も知らなかった。音信不通だったのだ。

充分に貰った立ち退き料は夫婦で折半にした。店の経理は貞が取り仕切っていたので、最後まで始末をして蓄えは貞のへそくりになった。昭一は新宿近辺で八百屋を始めるのだと言っていた。

狛江に着いたのは五時前だったが、秋の陽はすっかり暮れて車のライトばかりが賑やかに行き交っている。

二百坪の土地に建った木造アパート二棟と母子四人で暮らした家は、今では五階建ての鉄筋のマンションになっている。

五階は、エレベーターホールを挟んで貞と初子一家がそれぞれに使っている。

「お母さん、長い間お疲れ様でした。着替えを済ませたらうちの方に来てください。お寿司でも取って、お通夜のまねごとをするから」

初子はそう言うと、仁美と洋輔に手招きをして自分の家に入って行った。
貞はとても疲れていた。

骨壺を、居間に置いてある介護ベッドに載せると、そのままくずお頹れるように床に座り、ベッドに置いた自分の肘に頭を載せて目をつぶった。

長かった。昭一の介護を始めてから何年たつだろう。

一九九八年二月、警察から電話があった。

「並木昭一さんをご存知ですか？」

「はい、離婚したかつての夫です」

「火事で軽いやけどをしているので、新宿警察署で手当てをしています。並木さんはホームレスで新宿西口の地下街で寝起きをしているということで、調べさせていただいて電話をさせて頂いています。身元を引き受けて下さる方をご存じありませんでしょうか」

昭一がホームレス？ 火事？

貞の体に電気が走った。

お義母さんごめんなさい。小さい頃からあんなに可愛がってもらったのに。昭ちゃんのことをあんなに頼まれていたのに。

東京大空襲の時に火にまかれながら、別れ別れになる時、お義母さんが貞をすがるような目で見たのが最後の別れになったのだ。あの時の場面が貞の頭を駆け巡った。

「それは、ご迷惑をおかけしています。すぐに迎えに行きます」

「離婚をなさったのでしょうか……助かります。よろしくお願いいたします」

貞は、初子に事情を話し、二人で昭一を迎えに行った。

「貞、元気そうじゃないか。初子かい、年取ったな」

警察を出ると、昭一はもつれたような小さな声で、二人には目を合わせずに言った。

「父さん？ 垢だらけじゃないの、汚つたない」。

臭いがする。初子は思わず距離をあげた。

貞は、昔のままの気の弱い、気の良い昭一を見たような気がしてホッとした。

「昭ちゃん、家においでよ、これからは一緒に暮らそう」

貞も昭一も七十歳になっていた。

「お母さん、何を言っているの、一緒になんて暮らせないわよ」

「俺だっけ行きたかあないよ」言葉がもつれている。

「マンションの空き室があっただろう、とりあえず落ち着いた方がいいよ」と

貞。

荷物があるというので、昭一が住み慣れたという新宿の西口広場に行く間も昭一は足を引きずっている。身体も随分弱っているようだった。

やつとたどり着いた段ボール村は、火事の後にきれいに片付けられて何もなかった。

「お母さん、大丈夫？」 初子が覗き込んでいる。

「あー、うとうとしたみたいだね。疲れて立てないからしばらくこうしているよ」

「母さん、これが父さんのベッドだったの」 介護ベッドを見て洋輔が言った。いつの間にか、仁美も洋輔も来ている。

「しばらくここで横になつたらいいよ」

洋輔は小さくなった母を持ち上げて父さんのベッドに寝かせた。

「十年以上、寝たり起きたりだったのだから、父さんは」

「ここに来た時からずいぶん弱っていたのだよ。それが持ち直して九十一歳まで生きたんだ、大したものだろう」

「お母さん、お疲れ様だったね」 初子が改めてしみじみと言った。

「お父さんの世話は、お母さんがムキになって誰にもやらせなかったのだよね。住所も新宿のままだったから、介護もうけないで、私にも手伝わせないで……

：よく頑張ったね」

「ああ、これで、あちらに行ってもお義母さんに顔向けができるよ」

貞は何もかも忘れたような穏やかな顔をして深い眠りについた。

完

(4643字)